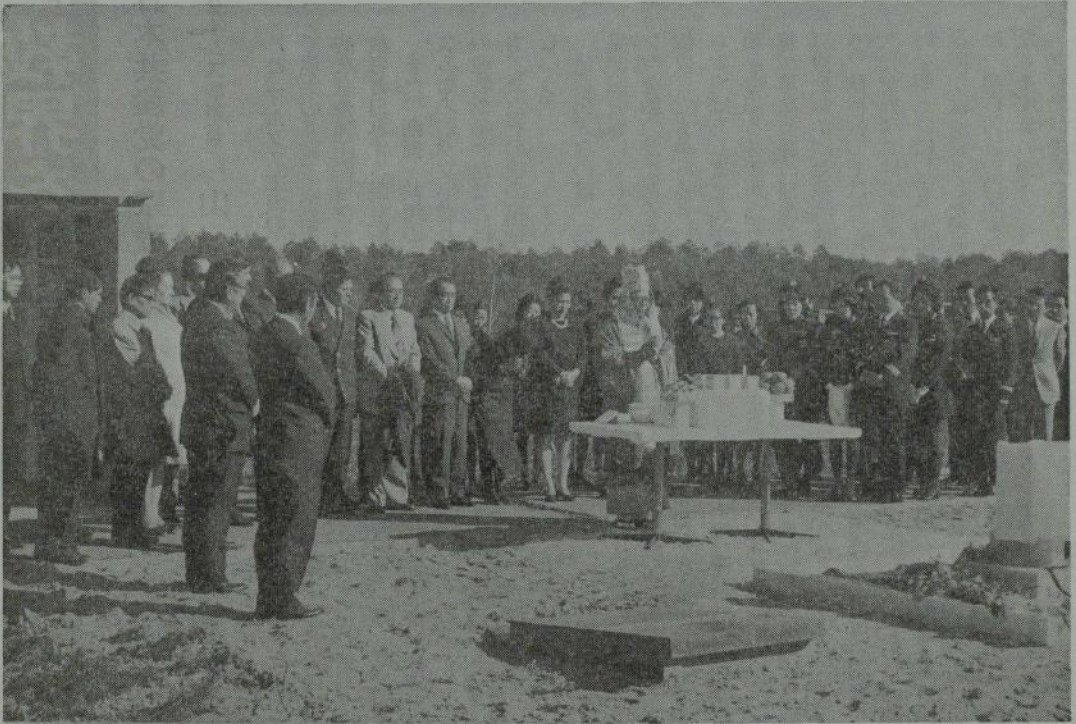


# 全 日 本 仏 教

NO. 213

12 / 50



## 心にゆとりを

十二月になると、街もあわたたしくなり、デパートではクリスマス飾りつけがされ、雑誌の新年号は早々と発売される。先へ先へと何かに追いたてられるように進み、一年が実に短い。

経済成長が社会の中に根をはって人々の中に入りこみ、秒ぎさみの生活、機械に追われる生活が、人間性のあり方をかえてきているのではないか。

「いかに立派な教えがあろうとも、それを実践しないなら、仏教の怠慢である」といわれるが、実践するときにはもはや社会のスピードの方が先にいっている。

仏教者自身がまわりの動きに知らず知らずのうちに流されているようなことはないだろうか。

追いつけ追いこせではない。それ以前に社会のスピードを落させて、人々の心にゆとりをもたせることこそ仏教本来の教えではないのか。  
(T・K)

写真はモスクワ郊外の霊園で仏式によって厳修された日航機遭難者の慰霊祭(四面記事参照)

# 今年の仏教界を顧みて

## 注目すべき日本共産党の宗教政策

仏教タイムス編集長 山口

一九七五年（昭和五十年）も、まさに暮れようとしています。この一年をふりかえって見て、仏教界に関するかぎり、内部的にはとくに大きな話題もないように思えます。しかし、ここに内部的といったのは理由があります。それは外部からの一つのコメントが、まさに画期的な、宗教界、ことに仏教界に対する大きな反省をうながしているように思われるからです。

いうまでもなく、それは七月中旬の池田大作創価学会会長と宮本顕治日本共産党委員長との対談にはじまり、創価学会・日本共産党のいわゆる「十年協定」、さらに引続いて宗教界全体に対する日本共産党の「対話キャンペーン」が行われていることです。

池田・宮本対談は、両者が個人的に文論的懇談をすることは自由ですが、「宗教と科学的社会主義とは、ともに自由と平等の人間社会を創造することを目的にする点で一致し」「ただ手段と方法が異なるように考える」とか、「宗教な

どと、マルクス主義の本質を知らず、加えて現実の共産主義支配国家における実質的な宗教弾圧に目をつぶった発言は、仏教者と自称する限り断じて許せません。また、創価・共産のいわゆる十年協定なるものが、文字通り政治的な利害打算の産物であったことは、その本文からも、またその後の推移を見ても明らかでしょう。

最も重大なのは、突如として日本共産党が宗教界に対して「対話キャンペーン」を始めたことでもあります。私どもは仏教者ですから必ずしも対話を拒否するものではありませんが、それには、まず相手を知る必要があります。マルクス主義が単なる経済理論ではなく絶対的な世界観をかかげた政治権力機構である限り、政治権力ではない宗教とは根本的に次元が異なるはずで、その本質的な違いを棚上げにして、恣意的な、戦略的な意図がはつきりした対話路線に乗ることは、自ら宗教の自由を放棄することにはなりませんまいか。

宮本氏が保障するという宗教活動とは「人間生命の限界や個人個人の能力の問題

### 賢

にかんしての、また人間関係についての人間の苦悩がつづくかぎり」「共産主義社会の高度な段階でも」「人類の遺産の一つとしての宗教として継続される場合」と、いくつもの仮言的命題がつづいていきます。

要するに、個人的な心の悩みを慰めるだけの「私事」としての宗教、ひたすら伝統のみに支えられた観念の産物、それも夢のような、果して実現するかどうかわからない高度な共産主義社会で、現実

## 仏教界の五大ニュース

鶴見大教授

松野純孝

今年の仏教界五大ニュースを挙げるにすれば、私は次の五つを挙げる。

浄土真宗本願寺派が門信徒会運動の昭和五十年運動計画書で、親鸞の面観、国王に向けて礼拝しないという言葉を用いて、その運動の指標としたことに宗内の物議をかもししたこと、真宗大谷派が法主の人事権を宗務総長に移したことで、曹洞宗が全国的規模で青年会を結成したこと、全仏大会が釈尊さえ恐らく考え及ばなかった新しい人類の不安解決を模索したこと、毎日新聞社が「宗教を現代に問う」シリーズ第二部で仏教を取り上げたこと。これである。

の洗脳、確圧、肅清の嵐をくぐり抜けて生き残った宗教が仮りにあるならば、保障してやるというのです。

私が、ここに仏教会の大きな反省を強調するのは、宮本氏のこの浅薄な宗教理解がそのまま、現実の仏教界のありようにつながると思えるからです。この大きな挑戦がはじめて、日本の宗教界、なかなか仏教に対してなされたことを安易にうけとってはなりません。

全日本仏教会が一九七六年（昭和五十年）に向けて真剣に取組むべき課題として、本年下半年を騒がした日本共産党の宗教政策をとりあげて所感とします。

感ぜられる。それは仏教が新しい段階に入ったということである。

本年一月一日の新聞の論調は、これまでどちがっていた。従来だと、文壇の大御所とか、宗教界の長老が登場した。ところが今年、もう政治、政治の一角だった。政治の記事で塗りつぶされていた。余りの政治にびっくりした。老人の年金を七千円から一万二千円にしたのは政治であった。こうして、政治は、文化とか宗教に代って、幸福を約束してくれるものと映ってきた。そこに政治で紙面一ぱいを埋めた理由がある。考えてみれば、政治は今日では台所のすみずみにまで入ってきている。台所を預っている主

婦たちが、いろいろと抗議や要求に立ち上っているのも、それを物語っている。

全仏大会が決議した人類共同体の世界建設、福祉優先、男女の平等、核兵器の廃絶、環境保全、人口抑圧、信教自由、政教分離の死守、の七項目のどれ一つを取り上げてみても、政治と関わりのないものは一つもない。また最近とみに促進されている平和運動においても一層その感を深くする。戦前においてはノー・コメントであった政治に、宗教界が近來さまざまの反応を示しているのも故なしとしない。

一方、政治の側においても宗教を求めている。人口問題とか、安楽死の問題などは、その雄なるものといえる。つい先日、アメリカで安楽死の願いが高裁で却下された。だいたい、こういった問題は神仏にきかなければならないものなのである。それが高裁に持ちこまれるというのが、まさに現代を象徴している。人口問題においてもそうである。そればかりではない。全仏大会が決議した項目のすべてが、今日のよりすぐれた政治課題なのであるが、それはまた宗教を抜きにして実現できぬものなのである。

このようにして、宗教と政治は互いに求めあっているというのが現代の状況であるということ今年をひしひしと感じさせた。創価学会とか共産党がドッキングしたことも決して偶然ではない。

このような状況のなかで、仏教徒は、仏教と政治について、そのかわり及び位置づけを明確にする必要に迫られてい

る。ここをはっきりさせておかないと、とんでもないことになる。

# 「第一回ブダガヤ結集」 日本代表、巡拝団出発

十二月七日か

らインドのブダガヤにある日本寺に五百名の代表を集めて開かれる「第一回ブダガヤ結集」に参加する人々が別掲のように決った。竹村教智(全仏副会長)日本代表は十一月二十九日に出発、巡拝団は十二月一日に羽田をたち仏蹟巡拝をして七日にブダガヤに入る。

日本寺は国際  
仏教興隆協会

(鎌谷勝雄理事長)の手で建設がすすめられて、すでに第一期事業の国際仏教協会館が昭和四十五年に完成、第二期事業の日本寺本堂の建設は昭和四十八年に落慶している。引き続き第三期事業に入ることとなり保育施設、医療施設、農業技術研究所、図書館などを計画、その第一次事業として日本仏教保育協会の担当で保育施設が建設される運びとなり、その地鎮祭がこの結集の中で行われる。  
なお「第一回ブダガヤ結集」は、(1)ブ

ダガヤ開発計画について、(2)仏教興隆に各国仏教徒は如何に協力すべきか、をテーマに十二月七〜九日の三日間、インド

各界代表、ブダガヤにある各国寺院の代表、各国仏教徒代表を集めて、法要と討論が行われることになっている。



全仏代表 清胤 徹昭



全仏副会長 竹村教智



全仏国際文化局長 中央区築地三の十五の一 築地本願寺内



常楽寺(時宗) 埼玉県川越市上戸一九四



服部 光順



鶴見 明音



野呂 幸忍



大沢 宗玄



事務局長 杜 多夫

# モスクワの慰霊祭

国際専門委員

松 涛 弘 道

最近天皇、皇后両陛下がご訪米の途についたことは記憶に新しいことであるが、ちようどその頃、わが国民の大半の目が東に向いていたとき、片や西のソ連モスクワ市郊外ではしめやかな仏式の慰霊祭が行われていた。それは、二年前にモスクワのシエルメチエ空港内で墜落した日本航空8040号機の遭難者慰霊碑の開除幕式で、正確には九月二十九日午前十一時から、モスクワ市のニコリスコ・アルハンゲルスコエ霊園墓地の一角でソ連側の航空省、アエロフロート航空、モスクワ市役所の幹部の立会いのもとに、わが国からは日本航空常務取締役千田図南氏や重光ソ連駐在特命全權大使をはじめ、ご遺族の代表や日航職員、現地日本人会員など約六十人が列席して厳修されたのである。

現在ソ連にはいくつかの日本人墓地が散在するが、日ソ政府の高官が立会っての仏式の法要が行われたのは、おそらくはじめてではなからうか。私はちようど事故直後、日本航空の要請を受けて現地に慰霊、弔問に出向いた関係もあって、今回も依頼を受け、ご遺族代表者や日航関係者と共に現地に赴き、慰霊碑の開除幕を無事にすませて帰国した。以下はその折の印象記である。

事故を起した外国機遭難者を慰霊するという異例の事態を重視したソ連政府の特別の配慮によるもので、最近の国際間の緊張緩和や日ソ間の平和条約の締結を前にして友好的な姿勢を内外に示しておきたいという現地政府側の高度な政治的判断が、こうしたことを可能にしたのかも知れない。おそらく、今から十年以前のことであったなら、仏式による慰霊祭をソ連で行なうことは到底不可能なことであつたらう。信教の自由をうたいこそすれ、モスクワといえは共産党政権のおひざ元である。血も涙もないといわれる唯物史観で固められたマルクス・レーニン主義のもとに、「宗教は阿片なり」とする無神論を標榜する国であるから、そうしたところに乗り込んで外国人が宗教的儀式を執行し、慰霊碑を建てるなどはおよそ想像もしえないことであつた。天皇が米国のアーリントンンの無名戦士の墓に花輪をささげるところの比ではない。ところが案するより生むはやすく、日航側の慰霊碑建立の申し出をソ連政府側があつさり受け入れ、話はトントン拍子に決まったのである。

よくよく考えてみればソ連人も人間である以上、血も涙もないわけではなかつた。百聞は一見にしかずで、案に相違しどこの墓地も墓前に捧げる花でうまっていた。いや、むしろ墓地はお花畑といっほうがよいかも知れない。慰霊碑の建つたニコリスコ・アルハンゲルスコエ墓地のみならず、ノボヂビチヤドンスコエ墓地にしても、私の垣間見たいずれの墓地も同様であつた。これらの墓地の前にはきままつて花屋があるが花売りの老婆がたずみ、多くの人びとが墓前で頭をうなだれ敬虔な祈りをささげていた。墓地は個別の墓と納骨棚とに分かれ、いずれも故人の写真がその名前や生没の年月日とともに石板に焼付けられている。最近たてられた石碑の中にも数多くのロシア正教独特の十字架が刻まれてあるのは意外であつた。

一九一二年のポリシエウイキ革命以後宗教活動が下火になつたといえ、こんなところに数多くの十字架が頭をのぞかせているところを見ると、やはり、人びとの信仰は一朝にして根絶しがたいらしい。日曜祭日ともなると朝早くからどこの墓地も墓詣りの人びとで賑わい、たまたまノボヂビチ墓地を訪れた筆者のそばでうら若い少女が、自分の親の墓であるうか、一心に石碑を水洗いし花束をささげていたのが特に印象的であつた。

こう考えていくと、ソ連には宗教をうんぬんしなくても、人びとの伝統的な信仰心は決して消え失せていないといえる。いな、むしろこの根強い信仰心のゆえにレーニンがソ連の父と崇められて神格化され、ロシア正教にとつて代つて共産主義という名の国家宗教がさかえ、民衆への忠誠が何等支障なく履行されているのであろう。いつもクレムリンの赤い広場前のレーニン廟には一目でレーニンの遺骸を見ようとするとソ連人の長蛇の列が後をたたず、街のいたるところに、国家に貢献した愛国者の銅像が目につく。故人となつてからも、その国家への貢献度によって人間の価値がはかられ、墓自体の規模も形もその貢献度に準じて異なり、国家や職場の予算でたてられるのはちよつと意外であつた。ソ連の元首相フルシチョフも左遷されて以来その価値が格下げされ、かつてレーニン廟内にあつた遺骸も今ではノボヂビチ墓地に移され、石碑もたてられてやっと安住の地を見出したのである。

## 金 援 救 救 援 金 八 百 万 円 を 越 す

仏教孤児院建設始まる

円となった。(十月十日現在)

一金 十万円也(富田林市横山一三二)

村王妙殿 妙見宗沙の宮教会北

一金 三万四千二百六十二円(春日市  
下白水一三〇二、淨  
運寺仏青殿)

なお、バンングラの孤児院長ビシユダナ  
ンダ長老から、最近来た書簡によると、  
日本仏教徒から贈られた前述の五百三十  
万円が基金となって、十一月より二階建  
コンクリート造りの孤児院建設が、ダッ  
カ市ではじめられるとのことである。そ  
れによると、総工費約三千二百万円で、  
二階建の建物は、孤児宿泊所をはじめ、  
タイプ、編物、絵画、手芸など各種リハ  
ビリテーションセンターにふりむけられ  
るようで、広大な規模をもつようであ  
る。

全仏では、来る十二月三日に清胤国際  
文化局長と鎌田田部長をバンコク市にお  
けるWFB理事会に出席させるが、その  
途次、その後集まった二百六十万円を最  
終分として現地に伝達する。

バンングラの政情は目下混迷をつづけて  
いるが、ビシユダナンダ長老らスタッフ  
は元気にボランティア活動を展開してい  
る。ダッカのダンマラーシカ孤児院には  
五十数名の年少男女が収容され、一方チ  
タゴン市のアグラサラ孤児院には百三十  
数名の孤児がいるが、この新築建物がダ  
ッカに建設されることによって、運営も  
かなり緩和されるものと思われる。

今回の総工費は、邦貨に換算して約三  
千二百万円であるが、日本からの寄金の  
外は、各国仏教徒、慈善家の寄付金、そ  
の他托鉢等によってまかなわれるといわ  
れている。

このように米貨に換算して、約二万八  
千ドルという大きな寄金は、日本以外に  
はなく、現地の仏教徒は少数ではあるが

## 世界仏教徒連盟結成 二十五周年を祝う

柳 了堅

大きなよるこびを持っており、両国の仏  
教による友好は、より一層増大したと見  
てよい。

本年は、世界仏教徒連盟(WFB)が  
結成されてより満二十五周年を迎えたこ  
とは世界十数億の仏教徒にとって、まこ  
とに意義深く、喜ばしい次第である。

思えば、第二次世界大戦によって、世  
界の国々が混乱し、ようやく落つきつづ  
あった昭和二十五年五月、セイロン国カ  
ンディの仏牙寺において誕生した。

この連盟の目的は、世界仏教徒を統合  
し、仏教徒としての自覚を高め、仏教を  
全世界に宣布し、世界に平和と幸福とを  
もたらすことにある。

この連盟の発会式と、第一回世界仏教  
徒会議には、わが日本から日本仏教連合  
会より、故高階瑞仙禅師、随員佐瀬淳光  
師および中山理々師が参加した。

その会議において、第二回をわが日本  
において開催してほしいとの全会一致の  
要請をうけて帰国した。

帰国後、これが受入れについて、尚早  
論もあり、またこの是非開催すべきだと  
の両論があったが、故長井真琴博士を中  
心とす自由仏教者が、日本仏教徒会議を  
結成し、開催を決意し直に準備に入った  
が、なかなか状況は容易ではなかった。

そうして準備をすすめると同時に、日  
本仏教連合会に対し、相協力して開催す  
ることを申入れ、ついに両者が日本仏教  
のためにも一致団結してこの大事業を完  
遂することに決定し、最高機関として連  
盟委員会を設けて準備をすすめ、それが  
見事に功を奏し、あの世紀の第二回世界  
仏教徒会議が、昭和二十七年九月二十五  
日より、東京築地本願寺における東京大  
会を皮切りに、京都、名古屋、広島をは  
じめ主要各都市において地方大会が盛大  
に催されたのである。

この大会には、二十一か国より政府代  
表、仏教代表百七十九名が来日し、終戦  
後のわが国の急速な発展ぶりに驚嘆した  
ものである。一方国内においては、こう  
した大規模な国際会議が、仏教によって  
初めて成功裡に開催されたことは、まこ  
とに意義ふかいことである。

しかも、この大会には、第三回大会を  
受もつビルマ国より、ウ・ウイン宗教大  
臣自ら出席するなど、その意気ごみは大  
変なものであった。

次いで世界仏教徒会議は、ビルマ、イ  
ンド、ネパール、タイ、カンボジア、マ

レーシヤ等の国々で開催され、明年は再  
びタイ国において第十一回大会が開催さ  
れる運びである。こうした各国での大会  
には、全日本仏教会より数百名にのぼる  
代表が参加し、仏教の宣揚と、国際親善  
交流の大きな役割を果たしている。

この連盟の目ざすところは、釈尊の教  
法を遵守し、仏法の宣揚につとめ、世界  
各国仏教徒の友愛と団結を強固にするこ  
と、社会、教育、文化および人道上の問  
題や、人類の幸福と調和のために努力す  
ることを憲章にうたっている。

いまこそ各国仏教徒は、この憲章の精  
神を体して、国籍を超え、人種、信条を  
超えて、全世界の人々が起ち上るべきと  
きである。

世界仏教徒連盟は、全人類に幸福と、  
平和をとりもどさせる原動力になるもの  
であると同時に、相互の一致協力と理解  
を深める基となる釈尊の教訓に重きをお  
き、あらゆる障害をのりこえて、ますま  
す各国センターが相提携し、連帯をつよ  
め、釈尊の教えを高くかかげていくこと  
が、大聖釈尊に対する報恩行であり、結  
成二十五周年を迎えた仏教徒の責任であ  
ると信ずるとともに世界仏教徒連盟がま  
すます興隆発展することを心から念ずる  
ものである。(国際専門委員)

### WFB 常任理事国会議

12月4日バンコクで

世界仏教徒連盟(WFB)の常任理事  
国会議が、本部のあるバンコクで、十二  
月四日に開かれる。この会議は来年の二

月にバンコクで開催される第十一回世界  
仏教徒会議（WFB大会）について討議  
されるために開かれるもので、全仏より  
清胤徹昭国際文化局長と鎌田良昭国際部  
長が出席する。

## 世界仏教徒会議 日本開催を答申

### 全仏国際専門委員会

十一月五日、全仏会議室で開かれた全  
仏国際専門委員会は、昭和五十三年十月  
に「第十二回世界仏教徒会議」を日本で  
開催するよう答申した。これは十月二十  
一日の国際専門委員会が種々の検討を行  
い作成した答申案をもとに提出されたも  
のである。



全仏会議室で開かれた国際専門委員会

答申によれば、海外より三百九十名の  
参加する東京大会を中心に、地方大会を  
含めて会期を十日間とし、お祭り騒ぎに  
なりがちな大会でなく、各種の記念事業  
をおこない、もって全一仏教運動の発展  
と世界仏教徒の交流を期すべきだとして  
いる。

——答申前文は次の通り——

昭和二十七年（一九五二年）秋「第二  
回世界仏教徒会議」が日本に於て開催さ  
れてより、すでに二十三年を経ている。  
その間二年ないし三年ごとにWFB（世  
界仏教徒連盟）加盟各国に於て大会が開  
催されてきた。タイではすでに三回、ス  
リランカでは二回開催されている。

しかるに、日本ではそれ以来開催され  
ていないので、ここ数年來、各国から日  
本開催が強く要望されている。たまたま  
日本仏教各宗においては、それぞれ祖師  
の遠忌大法要などかちあひ、日本に大  
会を招致する機、未だしの感があったの  
で断りつけてきた。確かに今日の日本の  
政治経済状態からみても、第十二回大  
会を開催することは洵に時宜を得たもの  
といえよう。

日本の仏教各宗派はそれぞれ持てる力  
をフルに發揮して活躍しているが、一方  
全一仏教運動に関しては、決して十分な  
ものとはいえない。そこで全一仏教運動  
の躍進の契機として本大会の持つ意義は  
頗る大であるといえよう。また国際信義  
上からいっても、日本開催をこれ以上避  
けることは出来ないのが実状である。  
去る十月一、二日にわたって神戸市に

おいて開催された第二十三回全日本仏教  
徒会議兵庫大会においても、第十二回大  
会の日本での開催が決議されている。よ  
って本委員会は別紙の通り答申する。

昭和五十一年十一月五日

財団法人全日本仏教会

国際専門委員会委員長

岡野 貴美子

## ブラジルの仏教

曹洞宗開教使の新  
宮師が語る近況

ブラジル曹洞宗開教使の新宮良範師が  
去る十一月十日に突然来訪、毎年ブラジ  
ルのサン・パウロ市で行う花まつり大会  
に使うための「花まつり」のポスターを  
全仏に求めにいらしたが、その際、ブラ  
ジルでの仏教事情をお話して下さった。

そのお話によると、現在、ブラジル国  
においては日本と同様に信教の自由がみ  
とめられており、カトリックに対抗して  
仏教も少しずつではあるが、一般知識人  
の中に浸透しつつある。その例として書  
店に売り出されるヨーロッパ及び印度あ  
たりから輸入された仏教書を英文訳した  
もの、それらかなり高度な仏書が完全に  
売り切れてしまつて注文をしなければな  
かなか手に入らない。しかし仏教書は売  
れても、それらはすべてカトリックの理  
念、語感にあてはめて解釈されてしま  
うので、本當の仏教理念が浸み込むのは  
まだ遠い道が必要だそうである。

また、ブラジル国における日本仏教  
（既成及び新宗教を問わず）は日本語の  
消滅とともにほろびるであろうというこ  
とをブラジルの統計上のどの調査でもい  
われているそうである。現に三世、四世  
に日本仏教を理解させようとしても、浄  
土系の仏教はキリスト教となんらかわら  
ない救済教として魅力がなく、解脱教と  
しての禅系統が多少うけいれられている  
ので、ブラジル人、土着の民族には浸透  
力皆無といつていい。このような問題を  
かかえ、開教使の方々はなんとか真実の  
仏教が、せめて三世、四世とつづくブラ  
ジル国の中の日本人社会に根ざし、芽ば  
えてくれるようにと日夜努力している、  
とのことであった。

## 長野県仏教徒会議

上田市別所温泉で開く

長野県仏教会（担当・上小仏教会）で  
は、十月二十八日「県仏組織の拡充強化  
をはかり地域社会の進展につくそう」と  
いうスローガンのもと、上田市別所温泉  
相楽閣を会場に、第二十一回長野県仏教  
徒会議上小大会を開催した。

当日は寺院住職、檀信徒、仏教婦人会  
仏教青年会など県内の仏教徒が多数参加  
し、記念法要（長野県仏会長、善光寺、  
大勧進・都築玄妙大僧正御親修、總會、  
映画、講演などが行われ意義ある集いで  
あった。全仏より白川総務局長、小峰組  
織部長が出席した。

なお長野市仏教会では、市仏三十周年  
記念として「市仏三十年史」が発行された

### 岐阜県仏教会

岐阜県は「天下分目の関ヶ原」とか「美濃を制するものは天下を制す」とかいわれるが、天平十二年南神宮寺を最古の寺とし古刹名刹、県下に二千三百七十か寺をかぞえ、真宗大谷派七百八十四、臨済宗五百二十三、本願寺派二百八十八、曹洞宗二百五十三、浄土宗、日蓮宗、真言宗、天台宗と統括している。

岐阜県仏の特色とい

## 県仏紹介

えは檀信徒との僧俗一体の仏教活動があげられる。今から十余年前当時全国的に新興宗教が増加し、既成仏教が極端に沈滞したころ、住職や特に心ある檀信徒から失望、期待、激動不信などさまざまな声があふきおこる中から、この運動が発展した。以下順をおいて、ここ十年程のあゆみを記してみたい。

天平の要観劇（昭和四十年）  
前進座の公演による「天平の豊」が名古屋御園座で開催され、県仏では初

## 大会には三万人を動員

### 僧俗一体で広範な活動展開

めて広く全県の寺院、檀信徒に呼びかけ三千八百名の参加を得た。これが檀信徒と共に歩む機縁となった。

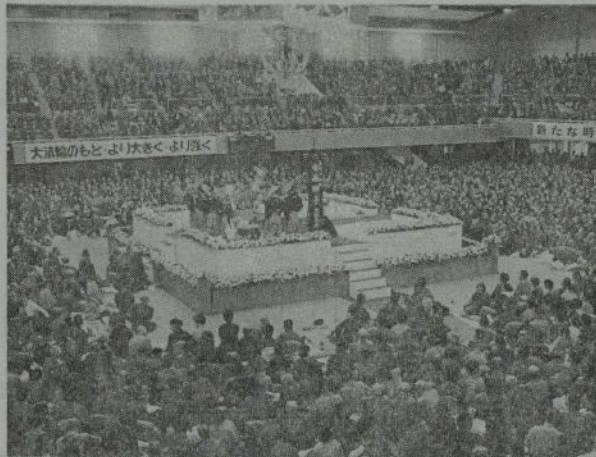
全仏加盟大会の開催（四十一年）  
久しく離脱していた全日本仏教会に加盟し、記念大会を岐阜市民センターで開催した。参加者五千人にたっし、全仏会長より檀信徒旗を授与された。

第十五回全日本仏教徒大会が岐阜県で開催されることとなり、一年がかりで準備に入る。特に檀信徒組織の拡充をはかり、会員十萬世帯の目標を達成。岐阜県民体育館に一万五千人、仏婦大会は高山市飛弾体育館に四千人、仏青大会は大垣スポーツセンターに五千人、幼児と母親大会は岐阜市民センターに七千人と、合計三万一千人が入場し「精神の国体」として県民に強い印象を与えた。

丸物百貨店で名宝展

県仏・檀信徒の協力で、県下の国宝や重文を展示。

檀信徒の袈裟かけ運動  
檀信徒の組織化が進み輪袈裟が制定され、榎浦名誉会長の妙心寺派管長就任祝賀とあわせ、岐阜市民センターに五千名が参加し、その折「青少年を対



よびかけられた。おもに夏休みを中心に一せいに期日をきめ、町・市ぐるみに参加者をつのり、寺院、在家、社務所、公民館などでおこなわれた。岐阜市の資料では、毎年七千人が参加している。全青協の「仏さまの教え」、伝道協会のカード、各家派の教材が使用される。昭和四十六年には岐阜市民会館に全仏大谷会長の御臨席を得、三周年大会を開催し、表彰状が渡された。

#### この他の行事

- ▽おとしよりの交通事故防止運動を県警と共催で行なう。
- ▽岐阜県文化財保護協会をつくり寺院の文化財保護に当る。
- ▽海外の仏教国、遺跡、慰霊法要団を六年前より毎年おこなっている。
- ▽創立十周年大会の折、念願の「檀信徒必携」が出版できた。

#### 今後のあゆみ

僧俗一体の檀信徒会活動もすでに十一年が過ぎ、熱心な人々の努力で、今もこの運動がすすめられている。昭和五十二年十月に、再び県民体育館に、青少年の「お経を習おう十周年の集い」を開催し、一万人のお経の大合唱を行なう。この運動の総まとめとしたいと思っている。

（岐阜県仏事務局）

【写真は盛況の第十五回大会】

「祖先を敬い、父、母を大切にし、幸せな家庭をきずくためにみんなでお経を習いましょう」と広く全県下に

#### お経を習おう運動

象とした一万人のお経を習おう運動が提案され満場拍手をもって承認、実行にとりかかることになった。

◇ 掲 ◇ 示 ◇ 板 ◇

▲文化庁では、安達健二氏に替り、安島弥氏が新しく文化庁長官に任命された。  
▲福岡県仏の事務局変更―福岡市中央区唐人町三丁目十番九号・大円寺内

哀 悼

菅原崇海探題大僧正(日光輪王寺門跡十一月十四日午前一時、急性肺炎のため遷化。八十八歳。葬儀は天台宗葬として十二月十八日午後一時より比叡山延暦寺にて。師は日光山輪王寺門跡、天台宗第二百五十二世座主、全日本仏教会副会長、栃木県社会福祉協議会会長などをおつとめになられ、四十一年六月から日光市名誉市民。

事務総局録事(11月)

昭和50年12月1日

- 五日 国際専門委員会 局内会議
- 十日 日本を守る会出席  
ブダガヤ結集打合せ会出席
- 十五日 組織専門委員会 局内会議
- 十七日 局内会議  
ブダガヤ結集説明会
- 十八日 時局対策委員会  
埼玉役員会出席
- 十九日 日本寺法要団結団式出席
- 二十九日 竹村代表ブダガヤへ出発

昭和五十年十二月一日発行  
十一月号 第一一三号

発行人 梶井徹大  
編集人 清胤昭乗

発行所 財団法人

全日本仏教会

東京総台東区浅草一ノ五ノ五(東京本願寺内)  
電話 〇三(八四三)六三〇四一ノ三

WF B創立25周年記念  
世界仏教徒会議第11回大会参加者募集

明年2月20日から26日まで、タイのバンコクで、世界仏教徒連盟創立25周年を記念して開かれる、第11回世界仏教徒会議への日本代表団員を募集します。代表団は下記の三団によって構成されますので、何卒ご参加下さいませようご案内いたします。

- ①理事団 日本を代表して参加し、会議の議事・記念の行事などの全てに出席する。
- ②スリランカ訪問団 大会の主要な行事に参加したあと、スリランカの仏跡を巡拝する。
- ③ボロボドール訪問団 大会の主要な行事に参加したあと、ボロボドールを中心に旅行。

—財団法人 全日本仏教会—

スリランカ訪問団

実施時期 昭和51年2月19日～27日 (8泊9日)  
参加費用 330,000円(予定)  
申込締切 昭和50年12月31日 (申込金3万円)

— 旅行日程 —

(2月19日) 東京—バンコク— (20日) WFB大会開会式出席— (21日) バンコク市内見学— (22日) 自由行動— (23日) コロンボ—ネゴンボ—アヌラダプラ—ポロナルワ視察— (24日) ポロナルワ—シギリヤ—キャンデイ視察— (25日) キャンデイ—植物園—コロンボ— (26日) 午前自由行動—シンガポール— (27日) シンガポール—東京

(大阪からも搭乗出来ます)

●取扱旅行会社 イースタン・ツーリスト

ボロボドール・バリ  
訪問団

実施時期 昭和51年2月19日～27日 (8泊9日)  
参加費用 350,000円(予定)  
申込締切 昭和50年12月31日 (申込金3万円)

— 旅行日程 —

(2月19日) 東京—バンコク— (20日) WFB大会開会式出席— (21日) 市内視察— (22日) ジャカルタ— (23日) ジョクジャカルタ—ボロボドール視察— (24日) デンパーサル—バリ島観光— (25日) バリ島観光— (26日) ジャカルタ経由香港— (27日) 香港—東京

●取扱旅行会社 千代田トラベル

●説明書ご希望の方は全日本仏教会国際部へお申込み下さい。

電話 03(843)6341-3